

平成27年度/28年度修士論文・卒業論文概要

江藤, 将行
九州大学大学院人間環境学府 : 修士課程

胡, 瀛月
九州大学大学院人間環境学府 : 修士課程

鄭, 修娟
九州大学大学院人間環境学府 : 修士課程

小林, 昇光
九州大学大学院人間環境学府 : 修士課程

他

<https://doi.org/10.15017/1807615>

出版情報 : 教育経営学研究紀要. 19, pp.139-172, 2017-03-27. The Laboratory of Educational Administration, Educational Law Graduate School of Kyushu University
バージョン :
権利関係 :



学校における性的マイノリティへの対応に関する一考察 —教師の認識に着目して—

柴田 里彩
(平成 28 年 3 月卒業)

【章構成】

序章 本論文の目的と方法

第一節 本論文の目的

第二節 本論文の方法と構成

第一章 性的マイノリティに関する動向

第一節 性的マイノリティとは

第二節 社会の動向

第一項 各セクシュアリティに関する動向

第二項 LGBT の登場

第三節 性的マイノリティをめぐる問題の捉え方

第二章 学校における性的マイノリティ

第一節 性的マイノリティをめぐる学校内の問題点

第二節 学校に求められる適切な対応

第一項 文部科学省の通知より

第二項 本研究の位置付け

第三章 性的マイノリティへの対応に関する教師の認識

第一節 調査概要

第一項 調査対象

第二項 調査方法と調査項目

第二節 性的マイノリティに関する授業

第一項 導入の経緯

第二項 実際の授業

第三項 授業への認識

第三節 教師にとっての「適切な対応」

第一項 4つの問題点における「適切な対応」

第二項 教師の考える「適切な対応」の傾向

終章 本研究の成果と課題

第一節 本研究の成果

第二節 本研究の課題

【概要】

序章 本論文の目的と方法

近年、学校に通う子どもの抱える困難に注目が集められており、教師はそのそれぞれに対し適切な配慮を求められている。中でも、性的マイノリティの子ども達については、学校内で適切な対応を行うよう、強く求められるようになってきている。その背景には、当事者たちが社会で生活を送る中での困難と、精神的な苦痛という問題が明らかになってきたことが影響している。

そのような中、2015 年 4 月には、文部科学省より「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」の通知が出された。

これにより、学校ではいわゆる「性的マイノリティ」とされる児童生徒全般に対し、「適切な対応」を求められることになったが、実際の対応に関しては各学校、各教師の裁量任せになっている部分が大きいと考えられる。

このような状況で対応を行う場合、集団の調和を重視する教師文化の存在から、その導入・実施の困難さが指摘できるため、教師の認識に着目した研究が必要となると考えられる。しかし、先行研究を概観すると、前述したような性的マイノリティをめぐる学校の問題点や当事者の精神的苦痛を明らかにしたものに留まっており、実際に性的マイノリティへの対応を導入する際、教師たちが対応をどう捉え、学校に取り入れていくのかという教師教育的な観点からの研究が欠けているように思われた。

そこで、本研究では、実際に性的マイノリティに関する授業を行った S 中学校の教師を対象にインタビュー調査を行うことにより、教師が性的マイノリティへの対応についていかに認識したか、またその上で教師達が何をもって「適切な対応」と考えたかを明らかにすることを目的とした。

ただし、本研究において、対応とは、当事者への直接的な対応だけでなく、当事者が過ごしやすい環境作り等の間接的な対応も含むものとする。

第一章 性的マイノリティに関する動向

第一章では、性的マイノリティの説明を行い、その存在をめぐる社会の動向を追った。まず、性的マイノリティが、性的指向、性自認、身体的性に関するものに分類されることを述べ、それに沿い性的マイノリティの類型を行った。これにより、性的マイノリティの種類が多様であり、さらにその境界が曖昧であることを指摘した。次に、性的指向・性自認を理由とする差別的取扱いについて、現在では、差別廃絶のための様々な活動が行われる中、いまだ偏見や差別があとを絶たない現状であること、そのために性の多様性への理解が求められていることを述べた。その上で、近年の性的マイノリティをめぐる問題についての考え方には、「人権をめぐる問題」と「性の在り方をめぐる問題」と捉える考え方の 2 つがあることを明らかにした。前者は、性的マイノリティの悩みや差別的扱い等に着目し、人権を保護すべきとするも

のである。後者は、性的マイノリティがなぜ特別視されるのかという点において社会に原因を見出す視点である。この視点では、全ての人々が多様な性を生きる一員であると理解する。どちらも性的マイノリティに関する問題に対し、「性の多様性」を理解することを必要としている点で一致しているが、「理解」の方向性が異なっている。

第二章 学校における性的マイノリティ

第二章では、まず、先行研究と資料等を概観した上で、学校内での性的マイノリティに関する問題点を、①男女二元的な学校環境、②特性教育観、③差別的扱い、④相談体制の未整備、の4つに分類した。そしてそのそれぞれについて、先行研究や当事者の発言をもとに、現状と背景を詳述した。そして、性的マイノリティをめぐる問題に対し、文部科学省の通知がどのような対応を求めているのか考察した。その結果、文部科学省の通知においては性的マイノリティ全般についての対応を求めており、求める対応が曖昧であること、それを導入・実施する方法が不明であることから、「適切な対応」の導入は各学校の裁量に任せられていることが指摘できた。

そして、このことを踏まえ、対応の導入の困難さにも関わらず、その導入が教師個人の裁量に任される可能性が高いため、教師の認識に着目する必要があること、先行研究において、教師たちが対応をどう捉え、学校に取り入れていくのかという、教師教育的な観点からの研究が欠けていることから、この点を明らかにする本研究の目的の意義を述べた。

第三章 性的マイノリティへの対応に関する教師の認識

第三章では、性的マイノリティに関する授業を導入したS中学校において、授業の導入から実施後にかけた教師の認識を明らかにし、その上で、教師が何をもって「適切な対応」としたかを分析した。その際、第二章で設定した学校における4つの問題点を、分析枠組みとして設定した。

その結果、授業後、学校に存在する性的マイノリティをめぐる4つの問題点について、教師達の考える「適切な適応」はそれぞれ異なることを明らかにした。また、その内容が、性自認に関するものに偏っていたこと、また、教師は性的マイノリティの問題を、人権を保護すべきとする視点から捉え、「適切な対応」を考える傾向があることを指摘できた。

終章 本論文の成果と課題

本研究では、性的マイノリティへの対応を導入した学校において、その後の教師の「適切な対応」に関する認識が異なること、そして認識の内容と傾向を明らかにした。このことは、今後、性的マイノリティへの配慮が急がれる中で、各学校へと対応が広がっていく際に、踏まえておくべき前提であろう。

一方で方法論に関して、分析視点が独自であり、その妥当性に疑問が残る。また、研究対象として選定したS学校の選定理由についても、曖昧さが否めない。この点については、学校における性的マイノリティをめぐる研究を行うにあたって、今後の課題となると考えられる。

【主要参考文献】

- 稻葉昭子（2010）『学校教育におけるセクシュアル・マイノリティ』創価大学大学院紀第3巻、259-280頁。
- 薬師実芳、笹原千奈未、古堂達也、小川奈津己（2014）『LGBT ってなんだろう？ーからだの性・こころの性・好きになる性ー』、合同出版株式会社。
- 上野淳子（2008）「心理学における性的マイノリティ研究－教育への視座－」『四天王寺大学紀要』第46号、73-83頁。
- 針間克己、平田俊明（2014）『セクシュアル・マイノリティへの心理的支援－同性愛、性同一性障害を理解する』、岩崎学術出版社。